

「政治理論とインテレクチュアル・ヒストリー」セッション、2024年11月10日(日)東北大学

ジュディス・シュクラーにおける希望と記憶

世話人: 安武真隆(関西大学)、小田川大典(岡山大学)、石川敬史(帝京大学)

司会: 安武真隆(関西大学)

報告者: 小田川大典(岡山大学)、田中将人(岡山商科大学)

討論者: 山岡龍一(放送大学)、

参加者数: 30名程度

今世紀に入り、政治思想研究の分野では、正義をめぐる大きな物語ではなく、不正義をめぐる小さな物語が語られるようになった。そして、そうした不正義論の多くがジュディス・シュクラーの晩年の著作に依拠している。さらに、Hess や Forrester の研究等により、「恐怖のリベラリズム」に留まらないシュクラーの再評価も進みつつある。その中で、本セッションでは、シュクラーの多面的な思想の一端を理解することを試みた。

冒頭、司会の安武からシュクラーの経歴についての簡単な紹介が行われ、続いて小田川大典が、「シュクラーとモンテーニュ:「知識の政治学」をめぐる」と題して報告した。小田川報告は、二つの世界大戦の経験後の「不確実性の時代」・「政治哲学の死」(ピーター・ラズレット)の時代に活躍した三人の思想家、アイザイア・バーリン、カール・ポパー、レイモン・アロンの「冷戦リベラリズム」と、シュクラーのいう「恐怖のリベラリズム」—残虐行為の回避を最優先するリベラリズム—との間に類似性を認める。そして「冷戦リベラリズム」の基底にあった「知識・認識の政治」に対応するものを、「恐怖のリベラリズム」の中を探るべく、シュクラーのモンテーニュ論に分け入っていく。

シュクラーの「恐怖のリベラリズム」論文が収録された『リベラリズムと道徳的生活』(1989)は、前年の大統領選挙の結果(ジョージ・H・W・ブッシュ候補の勝利)浮上した「リベラルはなぜ嫌われるか」の問題に向き合い、リベラリズムの実像と可能性を示すことを目指していた。この中で、シュクラーはリベラリズムの歴史的起源を、宗教戦争の中で形成された「寛容」に求めつつも(モンテーニュ)、「共通悪」としての「残酷さ」の回避を最優先するために、「より大きな残酷さ」を取り除くために「最小限の恐怖」を伴う法の執行をリベラルな制度構想とする(モンテスキュー)。

かかる「恐怖のリベラリズム」の基底にある認識論として、小田川報告は、懐疑主義に着目し、その内実を『ありふれた、複数の悪』(1984)のもとになった論文「残酷さを第一に考える」とスタロバンスキー『モンテーニュは動く』の書評(1987)に探る。そこでは、〈外見=現れ〉と〈内面=存在〉の断絶を認めつつ、それでも不確かな〈外見=現れ〉を頼りに他者とともに生きていく以外に選択肢はないというピュロン主義が浮上する。モンテーニュの影響下にあるシュクラーの思想には、「不確実という確実性」の視点があり、価値の多元化への応答があり、残酷さの横溢への危機感があつた。その点で、シュクラーもまた「冷戦リベラル」に位置付けられ、現代の諸問題を考えるための非理論的な探究であったとともに、「それぞれの国の高級官僚のための哲学」を提供した(ミュラー)とも言える。

続いて田中将人は「恐怖・共同・境界:リベラリズムの三つの構想—シュクラールとウォルツァー、そして丸山」と題して報告した。田中報告は、リベラリズム研究という観点から、ウォルツァーと丸山を、〈共同のリベラリズム〉と〈境界のリベラリズム〉として整理し、シュクラールの〈恐怖のリベラリズム〉との比較を試みる。第一に、エグザイルとしてのシュクラールによる、市民たるウォルツァーへの批判「マイケル・ウォルツァーの作品」(死後出版)を手掛かりとする。シュクラールによれば、ウォルツァーは、社会の根底にあるとされる共通の理解や価値観に信頼を置きすぎており、彼の小規模な中間集団を中心に置くヴィジョンには、忠誠心と義務の混同があり、マッカーシズムに陥る危険性があり、残酷さという最高悪の回避にとって不十分なノスタルジーであるとする。

これに対してウォルツァー「ネガティブな政治について」(1996年)と『品位ある政治を求めて』(2023年)を田中は、それへの応答として読解する。ウォルツァーの立論は、〈恐怖のリベラリズム〉を脅威に対する防壁としつつも、かかる防壁を守る動機づけとして、それとは別の〈希望のリベラリズム〉ないし〈共同のリベラリズム〉が前提となっていることを示唆する。さらにウォルツァーは、「形容詞」と「名詞」の相補性を手掛かりに、「リベラル」という「形容詞」を欠いたまま、何らかの具体的な「名詞」をまとっての権力の利用は不寛容に陥りかねないが、他方で、具体的な立場へのコミットメント抜きに「リベラル」という防壁は意味をなさないとする。

田中報告はさらに、日本におけるリベラルを考える手掛かりとして、マッカーシズムを踏まえ、シュクラールとウォルツァーの双方の類似の要素が看取される論文として、丸山の「現代における政治と人間」(1961年)に着目する。本論文では、壁が異端との交通を遮断することで自由を圧殺する効果を持ちうるものが指摘され、正統と異端の境界に居続け、デタッチしながらコミットし、コミットしながらデタッチすることの意義が強調される。以上、三者のリベラリズムの資質や関心の重なりとユニークさを整理しつつ、それら折衷主義的な性格ゆえに反発も生むが、それ故に重要であることを指摘する。

続いて討論者として山岡龍一からは、今回の報告で出なかった論点として、現代政治理論におけるリアリズムの中でシュクラールが好意的に取り上げられる点(ローカルなものを重視)をどう扱うか、という論点が提起された。田中報告について、三つのリベラリズムの中でエグザイルの主体としての葛藤は、ウォルツァーには欠落しており、〈恐怖のリベラリズム〉を独特なものとしている、とした上で、1)忠誠心と義務との関連で、イスラエルとの関連をどう見るか、2)法治国家の必要性を語りながら何故ホップズを軽視するのか(シュトラウス批判? オークショットとの異同、ロールズもホップズを忌避)、3)形容詞としてのリベラルについて、その内実とは? 名詞としての具体的立場とリベラルとの関連性、4)政治学におけるハーバード学派(現実的な研究と経験的な研究との総合)の中での位置付け、などについて問題提起した。

小田川報告については、1)冷戦リベラリズムが何故今問題として浮上するのか、2)モインの冷戦リベラルの中に位置付ける場合に、ルソーの評価をどう扱うか、sensitivityの問題としてルソーのpitiéと同じように捉えられるか、3)認識論としての懐疑主義とすると冷戦リベラルとはズレているのではな

いか、むしろロールズの政治的リベラリズムの先行形態(包括的ドクトリンの拒否)と位置付けられないか。様々な論敵の中でもウォルツァーとの対決の中で政治的リベラリズムが出てきた、文学のみならず最先端の社会心理学をも活用するシュクラの魅力、4)モンテーニュだけではリベラリズムにならないとして、『ありふれた、複数の悪』の評価として、政治教育の本ではないか？5)シュクラはいろんなレベルを使い分ける。普遍的人間性そのものに依拠した、コスモポリタニズムの擁護という面もあるが、他方で、それだけでは浅薄なので、正義論をアメリカ人向けに書き、犠牲者に耳を傾けること、残酷さに対する共感を求める。道徳的判断の難しさを個別のケースを通じて教授する教師の側面もある。

フロアからは、シュクラの日本(特に丸山)における受容、規範的政治理論として、残酷を回避する人間性を根拠とすることを自明にできるか、残酷さの区別・優劣はどうできるのか、シュクラにおけるウェーバーの影響などについて情報提供や論点提示が行われた。(以上、文責、安武)